

「出張」する映画

—— 現代日本の移動映画のエスノグラフィー ——

島 岡 哉

はじめに —— 懐かしの巡回映画・移動映画？

巡回映画や移動映画というと、どこかしら懐かしい響きを感じられるだろう。巡業映画、巡回映画、移動映画などのことばは、明治末期の活動写真＝映画の草創期以来行われてきた興行形態を指す。映写機・映画フィルムを各地に運搬して上映を行うというこのメディア形態は、マルチメディア時代の今日ではすでに過去のものになったと捉えられている観がある。そのため、巡回映画は、過去の体験を懐古する時にノスタルジックな響きを伴って語られる。こうした語りは新聞紙面にも掲載されている。2001年5月7日の朝日新聞には、次のような投書記事が掲載された。

小学校の巡回映画で何を見たかの話になり、飲み屋の客一同が「稲の成長を見た」「アメリカ人の暮らし」「上手な歯の磨き方」とさまざまに。「ナトコと言っていたのは私だけかしら」と女将。「あんたの造語だよ」と一笑に付したもののだから女将はすっかりしょげて。3月21日の夜のことでした。記事（映画を初めて見たのは「ナトコ」）を読んでびっくり。早速電話を取り上げ女将にわびを入れた次第です。「飲みに行って注進に及ぶべきだが」と弁明しつつ（さいたま市、砂辺松博さん）。⁽¹⁾

ここで語られている「ナトコ」映画とは、占領期にGHQの民間情報教育局（Civil Information and Education Section=CIE）が実施した巡回教育映画の通称である⁽²⁾。占領下に小学生だった人たちは、おそらく小学校を会場として行われたと思われる巡回教育映画の体験を、共通の話題にして語り合っている。

このような光景には、筆者自身もフィールドワークを行っている最中にしばしば出くわす。筆者はこれまで一貫して、近代日本の農山村における映画文化を考察してきた⁽³⁾。イ

⁽¹⁾ 2001年5月7日 朝日新聞（大阪本社版）夕刊、3版、第3面。

⁽²⁾ 中村秀之「占領下米国教育映画についての覚書 『映画教室』誌にみるナトコ（映写機）とCIE映画の受容について」<http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN6/default.htm>

ンフォーマントたちにも、主に昭和40年代以前に行われていた巡回興行の体験を、自らの少年・少女時代の回想としてノスタルジックに語る人は多くいる。おおむね、巡回映画・移動映画という言葉は、どこかしら懐かしい響きを持っているといえるだろう。

だが、現代のマルチメディア時代においても、巡回映画・移動映画は今も連綿と行われ続けている。しかもその映写場所は、小学校の講堂や公民館などの公的な場所だけにとどまらない。神社の境内、山林のキャンプ場、漁港、企業など、さまざまな場所で上映が行われている。人々は、多様な場所にスクリーンを張って映画を観るという上映形態を求め、何らかの目的を持って、移動映写を業者に依頼してくる。そして、さまざまな場所が上映空間に作り替えられる。こうした移動映写がもつ意味を探るために、筆者は、名古屋市中区に本社を置く映画会社「シネマ雄」へのインタビュー調査と、同社が行った移動映写への参与観察を行った。本稿は、具体的な移動映写の局面を浮かび上がらせ、移動映写がもつ可能性をさぐるエスノグラフィーである。

1. 移動映画の世界 —— 移動映画会社「シネマ雄」

1-1 「現場」への「出張」

中部地方の移動映画を担う会社のひとつ、株式会社「シネマ雄」は、名古屋市中区に本拠をおき、各地への「出張映写」を行っている。筆者は2004年7月5日夕方、名古屋の繁華街のひとつ大須近くの同社の事務所兼倉庫を訪ねた。シネマ雄は、1986年3月、音響機器のレンタルなどを一手に行う(株)光響社の映画部門が独立して創設された会社である。移動映画の担い手は各地方都市の映画館経営者が多いが、同社は、映画館を持たない映画業者である。

映画の「興行」というと男性の職業というイメージがある。しかも任侠者の性格をも想起する方もおられるかもしれない。しかし、シネマ雄の代表取締役は、マダムと形容するのがふさわしい女性、酒井麻由美氏である。同社の出張映写は、社長である彼女自身と、インタビューに答应ていただいた松浦康弘氏(38)、20代の女性スタッフ1人がほとんど

⁽³⁾ 島岡哉、2002、「戦前期日本農村における映画製作——奈良県吉野郡上北山村を事例として——」『京都社会学年報』第10号。島岡2003a、「近代日本農村の映画体験に関する社会学的考察——奈良県吉野郡野迫川村を事例として——」『ソシオロジ』第48巻1号、147号。島岡2003b、「聞き書き集——映画が生み出す居場所——」現代風俗研究会編『現代風俗研究会年報第25号』河出書房新社。島岡2004、「近代日本の巡回幻燈・巡回映画に関する文化社会学的考察——奈良県吉野郡の農山村を事例として——」『旅の文化研究所 研究報告』第13号、旅の文化研究所。

担っている。松浦康弘氏（以後、敬称を略し、松浦さんと記す）は中学時代に映画にはまり、大学では映画研究会に所属して映画を撮影し、その後映画業界に入っている。また、女性が社長を務める映画業者が珍しいとのことで、シネマ雄は、たびたび地元テレビ局や新聞の取材を受けている。

同社の事業内容を、「感動をレンタル シネマ雄」と題されたカタログも手がかりにして概観しておきたい。同社は、映画フィルムとDVDのレンタル業を行っている。「フィルムレンタル 各種イベント・学校上映会・啓発事業などに映画会をぜひどうぞ」と題したパンフレットは、「ファミリー」、「女性」、「人権福祉」、「環境」、「エンターテインメント」の項目にわけて映画をラインナップしている。「ファミリー」には『ピーターパン』（洋画）、『それいけ！アンパンマン』等のアニメーション、「女性」には『女はみんな生きている』（邦画）、『フリーダ』（洋画）が、「人権福祉」には『老親』（邦画）、『戦場のピアニスト』（洋画）、「環境」には『WATARIDORI』というドキュメンタリーや『ガイアシンフォニー 地球交響曲』など、「エンターテインメント」には、『ターミネーター3』や『半落ち』（邦画）などのヒット作が並ぶ。レンタル料金は作品によって異なるが、1日1回上映のレンタルで『ピーターパン』が10万5000円、『ターミネーター3』が12万6000円、「老親」は「特別料金」となっている。

同社はまた、機材のみの貸し出しも行っている。会議などに使用するプロジェクターの貸し出しは、コンパクトのモバイルタイプで11550円から、最も高性能のプロフェッショナルタイプが16万8000円までの価格帯になっている。その他、スピーカーや映写用スクリーンも貸し出ししている。

本稿が取り上げるのは、ソフトや機材のレンタル業ではなく、映写機とフィルムを持って赴く出張映写の業務である。パンフレットには、「出張映写のご案内 映写はお任せ下さい！」と題し、「設備のない会場は映写機一式をお持ちしての出張映写。映写機のある会場は、映写技師を派遣いたします」と記されている。シネマ雄の事務所には、日時と派遣技師を記したホワイトボードがかけられているが、そこに記された日程表からは、土日・祝日には3人のスタッフが持ち回りで映写しても間に合わない位の依頼があることがわかる。連日、スタッフのうち誰かは必ず、出張映写や、そのための事前打ち合わせ、および会場の下見に出かけている。

移動映写の業務は3つに大別される。

【16mm出張映写】

Aプラン＜体育館・講堂＞ 300名位～ ￥84,000～

Bプラン＜体育館・大ホール＞ 500～1000名位 ￥99,750～

【35mm出張映写】

会場等お決まりでしたら正式見積り致します

<1600w 体育館・大ホールなど>…概算¥136,500～

<4000w 屋内外の大規模会場>……特別料金

オプションでドルビーシステム音響も承ります。

【映写オペレーター派遣】

映写機のある会場に映写技師を派遣します。

16mmオペレーター 1 回上映… ¥31,500

35mmオペレーター 1 回上映… ¥37,800

価格はすべて消費税込み。地方の場合は交通費、宿泊費等は別途請求。

出張映写の価格は、16ミリと35ミリの映写機の機種別で異なる。35ミリの場合は、先方の会場の状況によって値段が変わる。もちろん、35ミリ映写機は16ミリよりも大型化するが、映像はその分鮮明になる。この35ミリの「見積もり」での値段設定が、どういう意味を持っているのか。筆者は、2004年7月の移動映写にアルバイト学生として同行したことで、35ミリ出張上映の苦労を知ることになる。次節から、移動映写への参与観察とインタビューに基づいて、屋内と屋外双方での移動映画の世界を記してゆく。

1-2. 文化会館での上映（35ミリフィルム：2004年7月19日）

2004年7月19日朝、筆者は名古屋市大須から、後部に映写機材をいっぱい積み込んだバン「トヨタ・ハイエース」の助手席に乗り込んだ。松浦さんの運転で、高速道路を1時間ほど走ったところにある農村地帯・海部郡佐屋町の中央公民館へ向かう。13時から、町役場社会教育課主催の「親子映画会」が開かれる。社会教育課が所有する教育映画『「1ねん1くみ」シリーズ 1ばんゆうき』（後藤竜二原作・東映株式会社教育映像部、13分・16ミリフィルム）の短編を冒頭に映写したあと、シネマ雄から運んできた35ミリフィルムの『Pa-Pa-Paザ☆ムービー パーマン タコDEボン！アシHAボン！』（シンエイ動画＝小学館＝テレビ朝日、2004年）⁽⁴⁾、『ドラえもん・のび太のワンニャン時空伝』（DORAEMON THE MOVIE 25TH ANNIVERSARY、シンエイ動画＝小学館＝テレビ朝日、2004年）⁽⁵⁾を続けて上映する予定になっている。筆者は、「35ミリ映写は2名以上で行わねばならないのに、この日はスタッフがみんなほかの現場へ行っているから手伝って欲しい」との依頼を受けていた。筆者は映画を全く知らないわけではないし、だいたい作業もわかるだろうから、という見込みからの依頼であった。

午前10時前に「現場」の公民館へ到着すると、社会教育課に挨拶をし、準備にとりかかる。同館所蔵の台車も借りて、ホール2階の最後部座席付近に機材を運ぶ。実はこの会館は、映写室に16ミリ映写機を備えているが、35ミリの設備は一切持っていない。そこで、35ミリ映写機2台、映写台、各種ケーブル、東宝から借りたフィルム、ドルビー・プロセッサー、フィルムの巻き取り器などの映写機材一式をバンに積み込んで来たわけである(図1)。すべての機材の搬入に30分近くを要した。

まず、3階映写室の高圧電源にケーブルを接続して2階ホールへ垂らし、映写用電源を確保する。次に、ホール所有の「ハコウマ」を借りてくるようにと筆者は言われる。ハコウマとは、木製の四角い箱で、約45cm四方の立方体の箱である。映写台の足の下にいくつかハコウマをならべることで、高さを微調整する。

次に、映写台のセットをはじめめる。松浦さんによれば、移動映画会社の腕の見せ所は、この

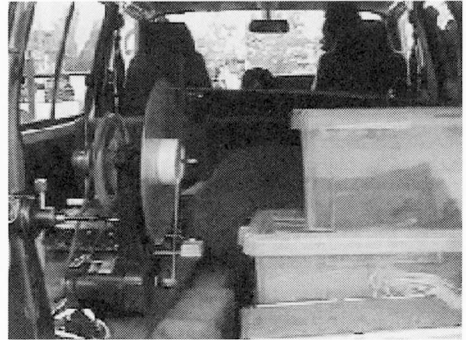


図1 映写機材一式

⁽⁴⁾ ビーチで休日を楽しむ人気アイドル、星野スマレ。どこへ行ってもファンに出会ってしまうスマレは、パー子に変身し誰もいない浜辺へ。しかしそこで、謎のタコ博士、ドクター・オクトに連れ去られてしまう。ドクター・オクトは、不思議なタコの機械を全世界に撒き散らし、人間を思いのままに操ろうとたくらんでいた。浜辺に残されたパー子のコピー人形は、すぐにパーマン1号に連絡を取る。スマレの大ファンのパーマン1号は、急いで救出へ向かうのだが…!

昨年に引き続き、「映画ドラえもん」の併映作として登場する「パーマン」復活第2弾。パー子こと、人気アイドルの星野スマレ誘拐事件に、4人のパーマンが力を発揮する。悪役は、なんとタコで世界征服を狙う、タコ頭のタコ博士。話す言葉はダジャレ交じりで、ちょっぴりナルシストなドクター・オクトだが、侮ってはいけない。スマレちゃん奪還に闘志を燃やしていたミツオことパーマン1号は、タコちゃんたちの墨吐き攻撃と吸盤攻撃により、必須道具であるヘルメットとマントを奪われるという大きな危機に直面する!

仲間の危機を助けるため、モンキーのブービーは大好きなバナナ、関西人のパーヤンはタコ焼きと、それぞれの得意分野を活かし大活躍。4人の絆をしっかりと見せてくれる、愉快的30分だ。全国東宝系にて「あらすじ解説」<http://movie.goo.ne.jp/contents/movies/MOVCSTD4780/story.html>

⁽⁵⁾ ママに内緒で子犬の「イチ」を飼い始めたのび太。しかし、捨てられていたのはイチだけではなかった。ドラえもんは、捨て犬や捨て猫をタイムマシンに乗せ、3億年前の大自然へ連れて行く。「進化退化放射線」で、イチに生きる術を教え込んだのび太は、「明日また来るよ」と約束し、帰っていった。翌日、再びタイムマシンに乗ったドラえもんたちは、時空の捩れから目的の千年後にたどり着いてしまう。そこは、「進化退化放射線」を使い劇的に進化した、犬と猫たちの国だった! この記念すべき年に作られた新作は、現代の人間社会に大切な何かを教えてくれるストーリー。のび太の優しさが、仲間たちの勇気とガッツが、25年分の輝きを放つ。人間世界の征服をたくらむ悪役、ネコジャラの声进行するのは、泉谷しげる。少しお転婆でチャーミングな犬、チーコには島谷ひとみと、ゲスト声優もハマリ役。ドラえもんの切ない恋も登場し、ユニークな物語が展開していく。全国東宝系にて

「あらすじ解説」<http://movie.goo.ne.jp/contents/movies/MOVCSTD4779/story.html>



図2 シネマ雄の映写台

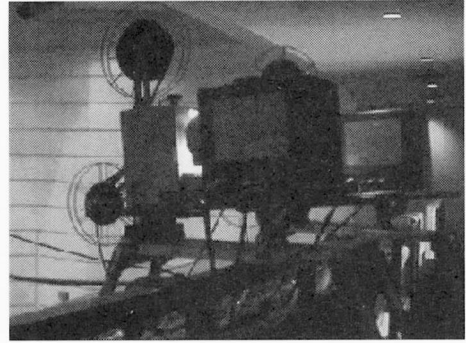


図3 35ミリ映写機のセット

35ミリ映写機をのせる映写台にあるという。映写機そのものは、どの業者でも大して変わらないものを使う。35ミリは重たいということもあるが、苦労は同じである。しかし、ホールでの映写の場合、電源設備やホールの構造、椅子の配列は多種多様である。臨機応変に、上映会場の状況にあわせた映写機のセットが要求される、それが移動映画の最も苦勞するところであると彼は言う。シネマ雄の映写台は、市販の台馬を改良し、スクリーンに投影する際の映写機の微調整と傾き補正が可能になるように、工夫して改良を加えたものであった（図2）。最後尾の客席と通路を隔てる手すりをまたぐようにして映写台をセットし、映写台の脚を伸ばしたり、映写機を支える台に取り付けられたねじをまわしながら、微調整をかけて映写機を固定してゆく。

35ミリの長編映画の場合、フィルムを何巻か掛け替えていながら上映しなくてはならないため、映写機は2台必要となる。筆者と2人で、2台の映写機から投影される映像がホールの映写幕にぴったり合わさるように位置を定め、セットが完了した（図3）。

次に、ドルビー・プロセッサーを会館のPA室と繋ぎ、会館のスピーカーから音声を出力するように設定する。試しに1巻の冒頭をかけてみると、ドルビーシステムの効果もあり、ノイズが除去され、映画館さながらの重低音の音響効果が得られた。第1巻を頭出しして映写機にセットし、全ての準備が完了した。

外を覗いてみると、開場1時間前であるにもかかわらず、車に乗って、母に連れられた子供達が集まってくる（図4）。祖父母、母、子と三世代で見に来ている人もいる。上映開始5分前には、通路での「座り見」がでるほどの大入り満員である。

13:00になり、社会教育課長による開会の挨拶が終わると、すぐに映写を開始する。筆者は、



図4 開場待ちの人々

会館映写室で16ミリ映写機を操作して、冒頭の教育映画を終映する。16ミリ映画が終わった後すぐに、松浦さんが次の35ミリ映画『パーマン』の映写に入るためであった。筆者は途中でロビーに出て、フィルム巻き取り器を使って映写終了分の巻を巻き戻す作業などを行った。

『パーマン』の映写中は子供たちも笑いながら座ってみていた。休憩を挟んで『ドラえもん』に入ると、長編作品であるためか見飽きてしまい、通路を走り回る低年齢の子供達も見受けられた。勧善懲悪と動物愛、主人公のび太と祖母との絆を描いたこの作品に涙していたのは、主に大人達であった。映写機のすぐ横に座っていた小学校4年生の女の子2人組は、「(映画館で)一回見たけど、もう一回見たいから親に頼んで連れてきてもらった」と筆者に語った。子供達の中には『ドラえもん』リピーターも結構いたようである。

映写が終わると、1時間ほどかけて機材一式を撤収してバンに積み込み、事務所へ戻り、倉庫へ機材を収納して、「ホールへの出張上映」が終了した。

1-3. 神社の境内での上映 (16ミリフィルム：2004年7月20日)

筆者は前日に松浦さんから、「明日は、昨日に比べたらこんな簡単なものかと思うとおもいますよ」と言われていた。2004年7月21日夕方、筆者は再びシネマ雄の事務所へ向かった。名古屋市中区の「闇の森八幡社」という神社の境内で行われる野外映画会を見るためである⁽⁶⁾。当日は、八幡社の氏子たちが集まる夏祭りの日であった。神社の境内はさほど広くはないが、鎌倉時代から続く由緒ある神社である(図5)。松浦さんによれば、ここでは毎年依頼を受けて映画上映を行っているという。19時20分からの上映に間に合うように、17時頃に機材を積み込んで、地下鉄金山駅近くの八幡社に向かった。機材は16ミリ映写機1台、スタンドタイプスピーカー2台と電源、コード類と



図5 八幡社境内

⁽⁶⁾ 「闇の森八幡社」祭神は、中央に応神天皇、左に仁徳天皇、右に神宮皇后を祭る。棟札によれば、永正十八年(1521)鶴見道灌等が造営したとある。この社は昔、若宮八幡とも称し、創建は古く、鎌倉時代の頃より集落の中心となっていた。「尾張誌」によれば、創建を源為朝としており、本殿の西に為朝使用の武具を埋めたといわれる鎧塚が残っている。

深田正韶撰、『尾張誌』、愛知県郷土資料刊行会、1979。



図6 境内のスクリーン



図7 16ミリ映写機（左は松浦さん）

フィルム、上映開始前や休憩時間に音楽を流すためのラジカセであった。

八幡社にはベビーカーやリング飴の屋台がでており、子供達が徐々に集まってくる。勤めを終えた保護者に連れられて参拝にやってくる家族も次第に増えてくる。松浦さんは、八幡社の裏手から境内にバンを乗り入ると、後部のハッチを開けて映写機をセットし始めた。松浦さんが到着する前に、氏子の男性たちは、本殿横の空間に、神社が自作した映写幕用の木組みを組み立て、そこにシネマ雄が貸し出した映写幕（16ミリ・スタンダードサイズ）を貼ってスクリーンを立てていたのである（図6）。松浦さんは、そこにぴったり映写できるように映写機を小さな映写台の上に載せ、バンの後部にセットした。その後、神社の境内に設置された電源から延長コードをひき、電源を確保する。これで、屋外上映16ミリ映画の準備は完了した（図7）。上映作品は、シネマ雄が所有する16ミリフィルムから毎年選んでかけている。今回は、『えみこと森のチビおばけ』⁽⁷⁾、『ドナルド・ダック』、『キューティーハニー』、『デビルマン』の4本であった。詳しくは分からないが、いずれも昭和40年代から昭和60年代にかけて、光響社とシネマ雄が購入した作品であるとのことだった。

上映開始前には、親子連れが、レジャーシートなどの敷物を敷いて陣取っている。上映が始まると、子供達がお菓子を手にスクリーンの前に集まってくる。大人達は、少し遠巻きにするように映画を見ている。たとえば、池の端の石囲いに腰掛けたり、木の切り株に座ったり、参拝者の受付をしている巫女さんが列がとぎれると映画を見ているなどの光景が見られた。子供達は、映写機が珍しくて気になるようで、光源を遮ってみたり頭の影をわざと映したりして遊んでいる。中には松浦さんや筆者に何かと尋ねてくる子もいた。夜8時を過ぎると仕事帰りの参拝者が多くなり、遠巻きに映画を見る大人達の数も増えていった。ちょうど

⁽⁷⁾ チビおばけの住んでいた森が団地になってしまったため、パパとママが別の森を探しに旅に出ている。いつも寂しく過ごすチビおばけは、この団地に住むえみこの「森をつくる不思議な木の赤ちゃん」を譲って欲しいと頼む。この作品は、教育映画として各自治体によって購入されている代表的作品である。

『キューティーハニー』がテレビ放映されていた頃に子供時代を過ごした30歳代位の親たちの中には、オープニングのテーマソングを口ずさんだり、子供時代を語り合っている方もいた（図8）。映画が終了すると、氏子の男性達によって映写幕が取り外され、木組みが解体されて映画上映は幕を閉じた。



図8 『キューティーハニー』上映中

この野外映画会は毎年行われており、闇の森八幡社が上映代金を支払っている。したがって、境内での映画上映は、八幡社側が、子供を含めた氏子たちに娯楽を提供する贈与的性格を帯びているのである。

次章からは、松浦さんへのインタビューに基づいて、屋外上映の申込先、興行形態、野外映写に求められている意味を考察する。そこから、人々が野外上映を行う動機を探っていく。

2. 屋外上映の依頼者たち

2-1. 奉納上映としての移動映画—— 奈良県吉野郡天川村・天河神社

松浦さんは、シネマ雄に移籍する前には、三重県伊勢市で映画館を経営する（株）伊勢レックに勤めていた。同社は現在、館名を「進富座」という旧称に戻し、単館系映画や芸術的・文化的評価の高い独立プロ製作の映画を上映する特色ある映画館経営を行っている。移動映写も行っていた同社では、映画『地球交響曲』の龍村仁監督から、奈良県吉野郡天川村にある天河神社での屋外上映を依頼され、松浦さんが出張映写を行った。

その時の上映作品は、『GAIA SYMPHONY 地球交響曲 第一番』（1992年、龍村仁監督、日本映画）と題されたドキュメンタリー映画であった。この映画には登山家のラインホルト・メスナーや動物保護活動家・ダフニー・シェルドリックらが出演し、オムニバス構成を取って作られている。主に、地球環境について考える作品として理解されている。この映画の監督・龍村仁氏は、個人や団体から寄付を募る形での映画製作を続けてきた。映画は主に、自主上映会にフィルムを貸し出すという形で上映されてきた。自主上映会の映写はシネマ雄のような代理店が担い手となった⁽⁸⁾。シネマ雄は、酒井社長の担当で「中部ガイアネットワーク連絡事務所」になっている。

龍村監督は、自らのホームページにおいて、「1989年の第一番の撮影開始以来、私は「地球交響曲」の制作開始と完成時に必ず天河神社に詣で、報告と感謝の神事をお願いし、奉納上映会をさせていただいてまいりました」と記している。役行者によって開かれ、修験道と山岳信仰の拠点である「大峯本宮・天河大辨財天社」（天河神社）の氏子たちも、監督の意志を快諾し、七夕祭りでの奉納上映が行われることになった。そこで上映の担い手となったのが松浦さんであり、機材を提供したのがシネマ雄だったのである。

天河神社の公式ホームページでは、神社は次のように紹介されている。

「霊山大峯の緑深い山懷にいだかれたここ天河神社は役行者や空海、天武天皇の太古より聖域として崇められながら川の流れの如く星の瞬く如く、如何なる権力にも組せず“ありのまま”で在り続けてきた場処」。

この天河神社のもつ信仰心と、『ガイア・シンフォニー』で描かれる世界観とが合致して奉納上映が行われることになったのだろう。「第一番」のパンフレットは、映画の制作意図をこう記した。

「あなたの声を、風は、確かに聴いているんです。山だって、耳を澄ましている。花や樹はあなたが呼びかけていることを、もうとっくに知っています。地球（ガイア）の声がきこえますか。」

自然環境や地球環境を謳ったこの映画は、「地球交響曲」の名が示すように、現在一番から五番まで制作されている。1992年の七夕祭りでは「一番」を神社の「外」で上映したと松浦さんは語る。「二番」の時は「参集殿」の中での上映であった。以後「三番」「四番」も参集殿で上映を行っている。

この「奉納上映」は、監督の願いもあって現在も引き続き行われている。本年度の「五番」の上映時には、映画フィルムを使わないデジタル・コンテンツでの屋外上映を行った。2004年、大峰道が世界遺産に登録された後の7月27日、天河神社の「氏子中七夕燈籠流し実行委員会」は、ホームページ上に七夕祭りの案内を掲載した。

暑中お見舞い申し上げます。

お陰をもちまして七月一日、待ち望んでおりました「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登

⁽⁸⁾ 「ガイアシンフォニー」の公式ホームページは、これまでの観客動員の経緯を次のように記している。このまぎれもない「生命の摂理」を私達ひとりひとりが、日常生活の場で、政治、経済、教育、科学、芸術、文化の場でフト思い出し、ほんの少し生き方を変え、選択を変えることが、病める地球を癒し、健康で豊かな未来を築く鍵になる、というのが映画「地球交響曲」のシリーズの願いでした。このシリーズは、20世紀末の10年間に第一番から第三番まで3本の映画が完成し、観客自身による活発な自主上映活動によって、180万人を越える観客動員を果たしました。

http://www.gaiasympphony.com/co_g5-1.html

録されました。先日斎行されました例大祭において、多くの氏子崇敬者の皆様と共に登録を御祝いし、賑々しい本年の例祭を納める事ができ、これもひとえに皆様の日々のお祈りの賜と心より感謝申し上げます。

さて、来る八月二十二日（旧七月七日）の七夕祭におきましても、世界遺産登録記念七夕祭と称しまして、左記の通り御斎行申し上げます。

前日二十一日には、映画監督・龍村仁様をお迎えしての最新作「地球交響曲第五番」の奉納上映も予定されておりますので、お一人でも多くお誘い合わせのうえ御参拝賜りますよう御案内申し上げます。

記

大峯奥駆道・霊峰「弥山」 世界遺産登録記念七夕祭

平成十六年八月二十一日（土）～二十二日（日）（旧七月七日）

二十一日 午後七時 慶祝「龍舞」兵庫商業高等学校龍獅團一行 （於 斎庭）

午後七時半 「龍村 仁監督 御講演」 （於 能舞台）

午後八時半 最新作「地球交響曲第五番」奉納上映 （於 斎庭）

※雨天の場合は参集殿となります（以下省略）

天河神社の告知が示すように、神社の「斎庭」における映画上映は、明確に「奉納上映」として位置づけられ行われ続けている。このことは、民俗学の知見を借りるならば、かつて境内で奉納の意味を込めて行われていた芸能上演が映画上映に変わっている、と見ることもできる。

2-2. 夏祭りと漁協社屋の新築祝い—— 三重県度会郡南島町・奈屋浦漁港

松浦さんが映画業界に入って初めて移動映写に行った所は、三重県の漁港だった。三重県の志摩半島から国道260号線を南下した先にある、度会郡南島町の奈屋浦漁港である。奈屋浦の漁業協同組合は、船着き場に新社屋を完成した。「天皇祭」という奈屋浦の夏の節目の祭の日に、社屋の完成祝いが重ねて行われる。漁協は、その日に出張映写を依頼してきたのである。

松浦さんが奈屋浦に行ってみると、新築祝いの花火が上がっていた。このときは、漁協の船着き場にスクリーンを立て、映写機をセットして上映を行った。お祝いムードもあって盛況だったとのことである。ちなみに、当日は（株）伊勢レックを取材に来ていたNHKも同行しており、漁港での移動映写の姿を撮影し続けた。漁港での映画会の姿は後日放送されたという。

漁港での屋外上映は、夏祭りでの娯楽提供と漁協社屋新築のこけら落としを兼ねた映画会であった。

2-3. 客寄せのための野外上映

2-3-1. 三重県尾鷲市・A鮮魚店 —— 店舗拡張祝い

移動映写は、商店の駐車場でも行われている。シネマ雄は、尾鷲の鮮魚店からの依頼を受け、駐車場（広場）を会場にして映写することになった。このような場合は、下見が不可欠になると言う。まず電源を確保するため、配電盤と電圧を確認し、映写機の設置場所を決定する。次に、スクリーンを建てる場所を探す。駐車場上映の場合は、映写幕を張る場所がポイントとなる。商業施設の場合、映写幕を張る枠を持ち込むか、2階か3階の窓枠からひもでスクリーンをつるす方法を取る。松浦さんは、2日間ともに屋外上映をすることで話をまとめた。依頼主は、買い物客に家族連れが多いことを考慮し、アニメ映画を希望してきた。1日目は『となりのトトロ』、2日目は『セーラームーン』が上映されている。

しかし、三重県尾鷲市を含む東紀州地域は、年間総雨量日本一の多雨地帯である。結局、雨のため野外上映は不可能となり、スクリーンカーテンを急遽利用した屋内上映になったとのことである。

この移動映写は、店舗拡張を祝って、店が顧客達に用意した「祝儀」としての意味合いを持っている。その上で、店側は映画による集客をはかり、収益増を目指すのである。

2-3-2. 名古屋市・Bスーパー —— 駐車場で定期的上映

シネマ雄の常連客には、スーパーマーケットの経営者がいる。このスーパーは、名古屋郊外に店舗展開を行っている郊外型小売店の1つである。彼は、集客動員と宣伝効果も兼ねて、駐車場で野外上映を依頼して来ると言う。映写電源は店の配電盤から取る。スクリーンは、店舗の細長い壁を利用し、2階から紐で吊して設置する。こうした場合、会場の大きさによってスクリーンサイズ（ビスタ、シネスコ、スタンダードの3種類）を決定する。

映画上映の日になると、店主は広告に激安商品を掲載するとともに、自ら屋台の店主になって売り上げアップを図る。松浦さんは、『名探偵コナン』のような人気アニメ映画を上映することで、大人と子供両方を集客することができるのではないかと語る。店主が自ら1本100円の焼き鳥を屋台で売り、綿菓子やお菓子の特売を行っている。野外映画の日

は、神社の縁日のような光景がスーパーマーケットの駐車場で繰り広げられている。

2-3-3. 下呂温泉・乗政キャンプ場—— 山林での野外映画

中央高速道路の中津川インターチェンジを降り、国道257号線を下呂温泉方面に向かって1時間ほど走った所に、「下呂温泉・乗政キャンプ場」がある。このキャンプ場は7月上旬から9月上旬までの季節営業で、低価格のため長期滞在者も多い。シネマ雄は、地域の青年会議所からの依頼を受け、山中で映画の上映を行うことになった。主催者の青年会議所は、国有林内にあり周囲に何も無い環境にあるキャンプ客達のために、一時の娯楽として映画を提供しようとした。

松浦さんは、山林での映画上映を行うために会場を下見に行き、悩んだという。まず電源をどうやって確保するか。次に、山林の中に安定したスクリーンを貼ることができるかどうか。この2点が難題であったという。電源の問題は、地元の電気屋さんに依頼し、長大なコードを引っ張って解決した。スクリーンは、青年会議所の方々にも手伝ってもらい、2本の木と木の間にポールを架けてスクリーンを張った。これで映画上映そのものは可能になったわけである。

ところが、日が落ち始めてから珍しい映画上映に集まってきた観客にとっても、映写を担当する松浦さんにとっても、思わぬ落とし穴が待ち受けていた。周りが山林で暗いので、映画の光に虫が大量に寄ってきたのである。見ている観客にとっては、真っ白なスクリーンに映し出された主人公の顔の部分に、大きなカブトムシや蛾が張り付き、黒点だらけの映画を見ることとなった。一方の松浦さんにとっては、35ミリ映画は12～13分毎に1巻ずつフィルムを掛け替えなければならないのに、映写機の光源に虫が飛び込んできて顔に当たり、なかなか思うようにいかなかったと笑いながら語った。帰ってからフィルムを巻き戻してみると、フィルムにアシナガバチの死骸が挟まっていたこともあったそうである。

松浦さんは、山林映写の体験はかなり過酷で、それでいて笑える体験であったと語った。

2-3-4. 三重県伊勢市・伊勢内宮前「おかげ横町」—— 活動弁士付ライブ

伊勢内宮前「おかげ横町」は、地元伊勢の名産「赤福」の製造販売会社が創設したレジャーパークである。その名が示すとおり、江戸末期の「おかげまいり」の際の伊勢の町並みを再現した作りになっている。そのなかに、「おかげ座」という歴史展示館がある。このレトロな建物の前で、シネマ雄は3度、野外上映を行っている。チャーリー・チャップ

リンや阪東妻三郎主演のサイレント映画を上映し、活動弁士のパフォーマンスをつけた野外上映であった。

ここで再現されたのは、明治後期に映画が日本に輸入された際に行われていた、活動弁士付の屋外上映の姿であった。

2-3-5. 国営木曽三川公園 —— お祭りイベントにおけるアニメ映画

シネマ雄は、日本最大の都市公園「国営木曽三川公園」内にある「138タワーパーク」（愛知県一宮市）内で開かれた「サマーフェスタ」でも屋外上映を行った。実施者が依頼した「企画屋さん」（イベント会社）から直接依頼があったと松浦さんはいう。2003年7月19日（土）～8月31日（日）の会期内に、「ちびっこ野外映画大会」と題されたイベントでは、8月2日（土）『鉄腕アトム』、9日（土）『アイスエイジ』、16日（土）『名探偵コナン』、17日（日）『リロ&スティッチ』、30日（土）『ワンピース』の計5回の上映を担当した。上映場所は野外ステージであった。

この企画は、サマーフェスタの恒例行事になっている。2004年7月18日（日）～8月31日（火）の会期中にも、7月24日（土）、8月7日（土）、8月13日（金）、8月14日（土）の計四日間、19:00から20:30の時間帯で「ちびっこ野外映画会」が行われた。このサマーフェスタは会場への入場料も無料であり、映画会も無料に設定されている。フェスタへの来客は多く、主催者は無料シャトルバスを運行するなどして対応している。しかもフェスタの映画会では、マンガ雑誌『週刊少年ジャンプ』連載中の大ヒット作品『ワンピース』の映画化第5弾作品『ワンピース 呪われた聖剣』などの人気アニメ映画が上映される（8月7日）。そのため、上映前から親や子供達によって陣取り合戦が繰り広げられると松浦さんは言う。

松浦さんによれば、8月7日の当日、映画上映開始前に雷と暴風雨に見舞われ、陣取りをしていた家族10数組が、屋根のあるステージに避難してきたという。風であおられるスクリーンを押さえながら雨が止むのをみんなで待っていた。19時に雨が止んだ後、観客は映画上映は中止だと思ったようで、少しずつ帰り始めた。松浦さんが「映写機動いたらやりますよ！」と叫んだところ、残っていた観客達は大喜びだったという。地面がずぶぬれだったため、観客達に各自倉庫から椅子を持ってくるよう依頼し、映画をスタートさせた。上映終了後も、椅子の片づけを依頼すると、観客達はみな協力してくれたとのことである。雨は屋外上映を不可能にするが、逆に雷雨と暴風という「すごい状況とともに過ごした仲間意識があったのかも」、「ああいうのは初めてだった」と松浦さんは述懐している。

これまで2章では、シネマ雄に出張上映を依頼する人々について、松浦さんへのインタビューに基づいて考察してきた。3章では、シネマ雄の事業の柱のひとつである「教育映画」の販売に焦点を当てる。

3. 社会問題の縮図 —— 教育映画の購入先と上映先

「シネマ雄」には、「東映株式会社 教育映像部」と「共和教育映画社」が作成した販売カタログがある。「教育映画」はビデオソフト化されており、その販売は同社の事業の柱のひとつとなっている。松浦さんは、これほど時代性を反映するものはないという。共和教育映画社のカタログは、「児童劇」「アニメーション」「社会教育」「学校教育／一般教養」に作品群をジャンル分けしている。では、「社会」を「教育」するフィルムとは、具体的に何を扱っているのだろうか。シネマ雄の事業内容と、2004年6月1日版の同社のカタログおよび東映株式会社教育映像部が発行している2004～2005年度版「東映映像カタログ」から、教育映画の作品内容とその上映依頼先・購入先の人々の姿を浮かび上がらせる⁽⁹⁾。

3-1. 交通安全映画会

時代性をもっともはっきりと現れるのは、警察署が、学校や公民館での交通安全指導のために購入する「交通安全映画」である。少しでも古くさくなると見ている側が全くリアリティーを感じない。写されている車種や道路状況などが新しくないとそれでもうだめなのだ、という。たとえば、子供達を相手に交通安全指導映画を見せる際に、写されている車種があまりにも古いと、指導ではなくお笑いになってしまう。また、子供の目線で撮影された交通安全映画は、コンビニエンスストアの進出などの都市の変容をはっきりととらえる。そのため、交通安全映画は毎年のように制作されている。購入する警察署側も、所蔵映像を検討し、新規購入を定期的に行っている。

3-2. 人権啓発映画会

「教育映画」の中でも、もっとも購入本数が多いのが、官公庁が行う「人権啓発映画」である。共和教育映画社のカタログでは、以下の2本が大きく扱われている。映画の題名

⁽⁹⁾ 社会教育映画には、社会福祉や高齢者、障害者とのふれあいを描いた作品群がある。このジャンルの作品にはあまり変化は見られないため、本稿では省略する。

とキャプションは次のようなものである。

『風かよう道』——「21世紀はITと人権の世紀——差別を生み出す古い因習とコンピューターを悪用した人権侵害を問う」

『セピア色の風景』——「笑いと涙で綴る感動の人権啓発ドラマ」

松浦さんは、「人権映画会」への出張上映で依頼される映画作品は、ドラマが多いという。この種のドラマには著名俳優が1人から2人、必ず起用されており、「見る側がとつきやすい」からでもある。『風かよう道』には「水戸黄門」シリーズの「うっかり八兵衛」役で有名な高橋元太郎、『セピア色の風景』には同じく「水戸黄門」シリーズで活躍した伊吹吾郎や、女優・石野真子らが出演している。

人権啓発のための映画は、女性差別の問題がマイノリティー差別の問題と接合されているように、立体的な作品構成を取るようになっていく。たとえば、『女性と子供と母親』は、「キャリアウーマンとして働く女性と、幼い子供を持つ母親が同和問題に直面し、悩みながらも、差別解消に向かって行動していく姿を描く人権学習教材。女性差別、在日外国人差別の問題を学習していく」作品である。

近年の教育映画は、人種概念も適用した人権教育を目指している。『愛は海より深く』には「サンコンは語る——僕の肌、黒いでしょ…肌の色隠せないの。僕思うの、心の問題が差別をなくしてくの。だって、同じ地球に住む人間だもの…!」とキャプションが付けられている。ギニア出身でテレビでも活躍するオスマン・サンコンを主演とし、アメリカ出身で同じくテレビでも活躍する帝塚山学院大学教授・ジェフ・パークランドを助演として起用している。この作品は、温泉につかりながら、2人が不当な人種差別について語り合う構成を取っている。

こうした「人権映画」作品は60分前後の作品が多い。だが、松浦さんは、かつての出張上映で、これらの作品群を朝9時から夕方4時まで、2日間にわたってぶっ通しで映写したこともあるという。この種の「人権映画」の製作本数の多さと定期的な上映会の実施は、逆にとらえれば、未だに残る差別意識の根深さと、人権問題の解決には困難な道のりがまだあることを示しているとも考えられる。

3-3. 学校映画会 —— 子供向け・保護者向け・教師向け

子供をテーマとした教育映画も多数制作され、学校での映写に使われている。『いのち輝くとき』——「虐待は命の問題です!」と題された映画は、若夫婦による子供の虐待を描いている。学校映画会は、幼児虐待のような社会問題を考えるために、保護者を対象に

して行われている。こうした時には、親の教育責任を明確にした『少年犯罪と親の責任』（文部科学省選定・2000年教育映像祭優秀作品賞）などの映画作品も使われる。この映画に関しては、学校の講堂などでの映写を目的として、あるいは「シネマ雄」のような移動映画業者の購入用として、16ミリフィルムが20万4750円で販売されている。

前出の2つの作品は保護者向けの映画だが、子供自身に見せることを意図してつくられた東映教育映画のリストを見ると、『アルコール』『たばこ』『薬物乱用』がすでに小学生対象の映画に指定されている。小学生を取り巻く環境の変化が、依存症対策映画の低年齢対象化という形で現れている。

かつて「学校映画」は、教師が児童・生徒・保護者に教育映画を見せる上映形態を指すことばであった。だが近年は、学校映画とは児童・生徒・保護者のための映画会だけを指す言葉ではなくなっている。教員研修用映画として東映は『教師のための 不登校Q&A——子供の心と向き合うために』、『スクール・セクハラ 全2巻』などをビデオ化し販売している。これらの映画リストは「現職教師」と題された項目に含まれている。近年、「学級崩壊」や「教師の指導力不足・不登校」が問題化され論じられている状況がそのまま現れている。この状況を打開する作品として、東映は「NHKビデオ 生徒の心をつかみたい」との副題を持つ『スクールカウンセリング』（パートⅠ、パートⅡ）を販売している。これは、NHKのドキュメント映像に、早稲田大学人間科学部で学校カウンセリングを専門とする菅野純教授が解説を加えながら、教育技法と実践を提示した作品であった。

学校映画は、児童・生徒・保護者のみならず、かつては上映する側であった教師を教育しなめという視線を持ちはじめている。現代の時代状況と社会問題を反映しながら、教育映画の製作・販売・上映は連綿と行われている。

3-4. 教育・研修映画会——公務員と会社員

最後に、もっとも上映形態が意識されにくい映画上映を扱っておく。それは、企業や官公庁での教育・研修のための映画上映である。職場を取り巻く諸問題を映像化した作品は多岐にわたるが、もっとも問題意識を先鋭に映像化しているのがこの種の映画上映に使われる作品である。『セクハラ代償』『セクシャル・ハラスメントと女性の人権』『公正な採用と選考』『転落の構図』『公務員倫理』などの直接的タイトルを持つ短編映画は、企業の人事部などが購入し、研修に使用されている。これらの公務員や社員教育用の映画が扱う領域は、従来の職場での男女差別や雇用慣行の改善だけにとどまらない。『転落の構図 イエローカード』は公務員の収賄を、『多重多額破産への道』はパチンコ依存症によるパ

チンコ破産を「普通のサラリーマン」を主人公として描く。法務省人権擁護局が企画し製作された『ザ・会社——えせ同和行為をなくすために』は、企業担当者向けの対応マニュアル映画になっている。

年功序列制が崩壊し、リストラや不当解雇が行われる現在、このような状況に直面した時に人生を考えるための映画『ハーフタイム』が「中年の危機」を扱って製作されている。さらに最新作では、『男が立ち止まる時——男の更年期を考える』と題され、近年社会的認知を受けつつある「男の更年期」概念を取り入れた研修ビデオも作成されている。

この種の教育研修映画の姿は、限られた場所で限られた人が見るだけであるため、ほとんど表面にでることはない。出張依頼も頻繁にあるわけではない。しかし、映画上映やビデオソフト購入という行為そのものが、購入先の会社や官公庁の立場表明となるという性質を持つ。つまり、人権問題や社会問題に取り組んでいるという立場表明ともなるのが、ビデオソフト化されたこれらの商品の購入である。私がフィールドワーク先で役場におじゃまし、教育委員会の部屋などに入ると、必ずこれら「教育映画」のビデオソフトや過去に購入した映画フィルムが、棚の中に詰め込まれている。

教育映画とは、逸脱、性暴力、犯罪、青少年問題などの社会問題の縮図なのである。

おわりに —— 移動映画の諸類型

マルチメディア時代を迎えた今日、ある映画作品をみたいならば、映画館で見る以外にも、レンタルビデオやDVDでの鑑賞、あるいはインターネット上で公開されるファイルでの鑑賞など、さまざまな鑑賞形態を選択することができる。しかし今でも、人々は連綿と野外上映を依頼し、上映を行い続けている。「おわりに」では、本稿で紹介した事例の考察を通して、移動映画の類型化を試み、結論としたい。

まず、常設映画館での映画観覧という観覧形態と移動映画会の大きな違いは、上映の担い手と集まってくる観客とが密接に関わっている点にある。主催者は設営が終われば観客となるわけである。次に、2章で紹介した事例のうち、天河神社と闇の森八幡社での屋外上映は、それぞれ「奉納上映」と氏子への贈与であり、漁港での屋外上映会は祭りの出し物の1つであった。この3つは、近世的芸能上演形態の現代版であると捉えることができる。映画の上映によって参拝者や氏子たち、参加者を集めることが目指されていたのである。この観点からは、山林のキャンプ場での屋外上映も、青年会側からキャンプ客への贈与的性格を帯びていると考えることができる。町役場主催の親子映画会も入場料は1人300円という低価格設定であるから、町の社会教育課が地域の親子たちに安価で映画を贈

与していると捉えることも可能である。また、鮮魚店、スーパーマーケット、おかげ横町、三川公園での上映は、映画上映によって日常的空間を祝祭性を帯びた空間に作り替えることで、買い物客などの集客動員を狙うものであった。2章で考察した事例は、人々は、屋外映画会が持つ凝集性の働きを求めていることを示している。

それに対し、3章で考察した教育映画は、限られた空間で限られた人が見ただけである。教育映画の内容は、ジェンダーフリー、エスニック・マイノリティーへの差別解消、情報化社会の落とし穴、子供の犯罪、収賄やギャンブル依存などの逸脱、エイジングを考えるものなど多岐にわたっていた。ジェンダー論や逸脱論などを収録した社会学の教科書にもひけを取らないラインナップで構成されており、最先端の社会問題についての考え方を取り入れた内容になっている。ところが、こうした教育映画は、購入数が多い割には上映会数は少ない。また、松浦さんのインタビューにもあったように「2日間ぶっ通し」の上映もおこなわれる。しかし映画を「ぶっ通し」見たら、映画の内容はほとんど飛んでしまい記憶に残らないことは想像に難くない。この点を考えてみれば、最先端の社会問題を描いた教育映画の上映会は、映画の内容よりも、映画を見る行為そのものに意味があると捉えることができる。しかも、この種の映画を見る人々は、いわば義務的に足を運ぶ人たちであり、購入者の企業や官公庁もある程度は義務的な購入を行っているのが現状である。教育映画は、映画の内容が教育効果を持つことを期待して制作される。しかし、実際には、映画ソフトの購入行為そのものや会場に集まること自体が、重要な要素になっているのである。

本稿は事例紹介と若干の考察の域にとどまっているが、今後の継続的調査によって、さらに移動映画の世界と移動映画会が持つ意味の複雑さを解き明かしてゆきたいと筆者は考えている。

【参考文献】

加藤幹郎、2001、『映画とは何か』、みすず書房。

Jason E. Squire ed, 1983, *The Movie business book : International Edition*, New York : Simon & Schuster. =

ジェイスン・E・スクワイヤ編、小田切慎平訳、1993、『映画ビジネス現在と未来』、晶文社。

田中純一郎、1979、『日本教育映画発達史』、蝸牛社。

中村秀之、2002、「占領下米国教育映画についての覚書—『映画教室』誌にみるナトコ（映写機）とCIE映画の受容について—」<http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN6/default.htm>

長谷正人、中村秀之編著、2003、『映画の政治学』、青弓社。

細川周平、1999、『シネマ屋、ブラジルに行く——日系移民の郷愁とアイデンティティ——』、新潮選書。

前田幸恒、1997、『映画興行師』スタジオジブリ

四方田犬彦、2000、『日本映画史100年』、集英社新書。

（しまおか はじめ・博士後期課程）

An Ethnography of “Traveling Theatres” in Contemporary Japan: A Case Study of a Cinema Promotion Company in Nagoya City, Aichi Prefecture

Hajime SHIMAOKA

The purpose of this study is to analyze how people experienced so-called “traveling theatres (idou-eiga)” in contemporary Japan. For this purpose, I have interviewed members of a cinema promotion company, “Cinema You” in Nagoya city in Aichi prefecture. Also, I worked as a staff at one of the screenings of the traveling theatres. Based on these ethnographic data, the screenings of this company will be investigated.

Since traveling theatres are usually regarded as a relic of a bygone age, they have rarely been examined in former cultural studies or media studies. In this study, other important aspects of traveling theatres will be discussed. By focusing on the time and space in which ordinary people watched films, the multiplicity of the meanings of the traveling theatres will be presented.